

## 言葉の影響

JICA ベトナム事務所・企画調査員

森田裕子

私は昭和54年に岡山県倉敷市の兼業農家で生まれました。地元出身の祖父母と同居した環境で育ったことから、核家族が増えてきた当時、同級生の誰よりも年季の入った岡山弁でしゃべるので小学校で笑われたこともある。岡山弁と一概にいても、他の地域と同様、県内の地域により方言は少しずつ異なる。例えば標準語で「早くしなさい」を、岡山市では「はようせられえ」、倉敷市では「はようしねえ」という具合である。小学生高学年の時、担任の先生が、クラス全体に向かって「人に、はようしねえと言っはいけない」と言われた。私はその時「人を急かすのはいけないことなのだ」と理解した。数年後、岡山県内各地から生徒が集まる高校に進学し「早うせられえ」とクラスメイトが言うのを聞いて初めて、もしかして「はようしねえ」と言っいけないのは「早う死ね」に聞こえるからだったのではないかと気付いた。

普段から言い慣れていると、自分の言葉が他人にどう映るのかは気付きにくい。もし県外から倉敷市へ転校してきた生徒が、新天地での生活に慣れず鈍いばかりに転入早々「早うしねえ」と連日言われたら悪影響は間違いないだろう。

私は2006年より国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊員としてベトナム北部の農村地域に2年間赴任し、その後2009年よりJICA技術協力「中部高原地域における貧困削減のための参加型農業農村開発能力向上計画」プロジェクトの専門家として、カンボジアやラオスと国境を接する中部高原地域にある郡の役場に3年半の間配属された。ベトナムでは約87%はキン族（一般に「ベトナム人」と呼ばれる人）が居住し、その他政府に公認されているだけで53の民族が存在し、彼らは少数民族と呼ばれている。プロジェクトが対象とした地域はバナ族という少数民族が多く居住する地域であった。

ベトナム北部の農村に居住していた時は少数民

族の方と接することがなかったので、中部高原へ赴任後初めて少数民族の生活に触れた。行政組織の末端レベルの役場であるコミューン人民委員会で実施された会合に初めて同席したとき、バナ族の行政官が「私たちバナ族は遅れていて、貧しいので、支援が必要です」と、コミューンの上位レベルである郡人民委員会幹部に対して発言し、周りのバナ族行政官や郡人民委員会幹部は笑っていた。何故そのような自虐的な内容に対しバナ族自身が笑っているのか理解できず、私には奇妙な光景に映った。つられて笑わないようにした。

その後も、中央省に所属する行政官や地方省（日本の「県」に相当）に属する行政官から「少数民族は民度が低く、遅れており、貧しいので、発展するために指導するべきである」という発言を度々聞いた。党や政府が作成する公文にそのような記載があるのも見た。

当のバナ族の方は、おそらくそのような言葉を聞くまで、何に対して遅れているのか、「貧困」の定義は何なのか、考えてこなかった。政府の「貧困政策」では貧困層に物資支援がなされるが、明確な基準に基づいて貧困家庭の数は計算されておらず、その年に割り当てられる貧困家庭数に応じて村の中で誰が今年の貧困層となるか決められるような具合である。

移動式焼畑耕作による自給自足の生活で暮らしてきたバナ族のコミュニティにとり、収入を基準に計算した「貧困」という概念は外から持ち込まれたものである。しかし人間は「遅れている」、「貧しい」と言われ続けると、自分達にとって不都合でない生活条件や幸せとさえ感じていた習慣を突然卑下するようになり始める。洗脳に近い。

ベトナムで過ごしたことがある外国人ならば一度は「ベトナムは貧しいだろう」と言われたことがあるだろう。ほとんどの場合キン族の方の発言であるが、彼らに何故貧しいと考えるのかと問うと、一番多い反応は、考えていなかったかのよう

戸惑う。次に多い反応は「日本より貧しい」という回答である。つまり実際に生活上の困難があるわけではないが、テレビなどから知る日本とベトナムのGNPを比較し、相対的に劣等感を感じているタイプである。彼らの生活レベルは中級か以上である場合が多い。私が真に貧困家庭だと感じた方で自身を貧しいという方はいなかった。多くの貧困家庭は家族に病人がおり借金を抱えていたり農地の条件が悪く朝から夜遅くまで不在であったりするなど、自身をわざわざ貧困であると呼ぶ余力さえない。記憶を辿る限り、政府或いはプロジェクトからの支援を期待した会合などでの発言を除き、自身を遅れている或いは貧しいと言ったバナ族はいなかったように思う。村の老若男女で集い壺酒を囲んで飲んでるところへお邪魔すると「俺たちはこうやって飲みばかりして駄目なんだよ」と言いながらも幸せそうに皆で笑っている様は、日本の現在社会よりずっと幸せそうに映った。このような寄合を通じ、村の結束を高め、色々な問題を話し合っ解決するのだそうだ。日本にも存在したような風習である。

私が居住していた地域のキン族は「遅れている」バナ族が栽培する野菜や米や肉を買うことを好んでいた。理由を尋ねるとバナ族は化学肥料を使わず、嘘もつかないため、安心して購入できるからだという。つまりバナ族より「発展している」キン族が必ずしも全ての領域で優れているとは考えておらず、「遅れており、貧しいバナ族」は、都合の良い上下関係の構造を作る際に適用される言葉なのである。

日本のニュースに言葉の暴力が自殺を引き起こしているケースを見る。加害者となった側は言葉にそこまでの影響力があると考えていなかったような発言をしている。各種のハラスメントも加害者の多くは自身の言葉が相手に与えた苦痛を十分理解していない印象である。

ベトナム、日本いずれの事例からも、言葉の与える影響の大きさを考えると、学校や職場において参加型コミュニケーションの時間を確保するなど具体的な対策を取る必要があるように感じている。例えば、グループごとに、先生役、同級生役や、上司役、新人役などを設け、事例を基にロールプレイを実施する。その後、言われた側がどのように感じたか、言った側はどのように感じたか、この結果から考えられることや対策などを全員で出し合う。このような時間は、一方的に、「〇〇とってはいいけません」、「〇〇してはいけません」と伝えられるより、ずっ

と心に響くし、想像力や感受性を鍛えたと考える。

私が青年海外協力隊員だった時、ベトナム人カウンターパートとのコミュニケーションの困難があった事例をロールプレイの題材として取り上げ、在ベトナム協力隊員の総会で企画実施したことがあった。冒頭で目的や設定された状況の背景を説明した後、各グループが5名5役となるように分け、役のキャラクターとロールプレイを開始する最初の発言内容までを割り振り、予め設定された役のキャラクターに基づき会話を進めた。その後、ワークシートに記入した内容に基づき各グループに発表してもらったのだが、事例を提供してくれた隊員より実態の補足説明と共に「色々な見方があると分かり気分が楽になった」という感想があり、他の隊員からも「自身の業務にとっても参考となった」という感想があった。

右は一例であり実際には色々な方法があると思うが、現在、特に日本の都市部において、兄弟姉妹間や近所の子供同士の遊びや喧嘩から学ぶ時間が減り、人間対人間のやりとりを通じたコミュニケーション力を築く機会が限られているだけに、積極的な場の創出が重要であると考えられる。



初めて文字を習うバナ族の母親と見守る子供たち（プロジェクトの識字教室より）



53歳で文字を読み書きできるようになったバナ族の女性（写真右）。全国紙でも取り上げられた（プロジェクト活動「識字教室」より）